



『姫路の中世城館跡』をたずねて その1

ここで取り上げる中世の城館跡は、播磨守護、播磨国国人領主や村落領主等の構築した軍事的政治的な拠点施設、合戦に際して構築された臨時的な陣地、村が防御待避施設として構築したとみられる施設などである。遺構が不明であったり史料が残存しないことも多いが、江戸時代以降編纂された地誌や伝承、調査報告等により、姫路市内の戦国時代までの「城」、「要害」、「構」、「構居」、「館」、「陣」などと呼ばれる遺称地を紹介する。(注1：旧郡名は江戸時代(旧高旧領取調帳による)の郡域・郡名。注2：『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』(兵庫県教育委員会)は『城館』、『城郭研究室年報』は『年報』、『TSUBOHORI 姫路市埋蔵文化財調査略報』は『略報』、『赤松家播備作城記』は『城記』と略。注3：山城のほとんどは整備されていないので立ち入ると危険です、平地から展望して歴史的想像をしてください)

①別所構居跡(旧印南郡 姫路市別所町別所)

『年報』Vol.23 は別所町西公民館・大歳神社からJ A兵庫西別所支店敷地南が構居北辺、国道2号線別所小学校交差点南東の実際寺から南側水路が構居東辺と想定。日吉神社参道と旧山陽道交差点南西(J A兵庫西別所支店)に古墳があったことを伝え、構居は古墳の南西とする。「城記」、『播磨鑑』は福居城と記し印南郡大塩庄の内、城主は大塩半左衛門尉、天正6年(1578)落城とする。『播磨鑑』「御着落城之事」に「大塩半左衛門、印南郡寺田村ノ構主、今ノ福居新村」は安養寺僧徒らとともに御着城に籠城、秀吉は別所村の寺院や村を焼き払うとあり、平成10年度第13次別所土地区画整理事業地内調査(『略報』)は、堀跡や焼けた一石五輪塔、土坑に埋まった焼土や炭を検出している。寺田が『印南郡誌』のいうように別所新の旧名であれば、大塩庄(現大塩町・高砂市北脇地区から別所町付近)は王家領庄園(安楽寿院領、*庄は荘でもよい)であり、正安2年(1300)亀山上皇から南禅寺に一部権益が寄進され、大塩庄内の寺田村は文和2年(1353)梶井宮から大徳寺塔頭徳禅寺に一部権益の寄進か。大塩庄、寺田村の現地庄官が大塩氏がみえ、大塩には北脇城(高砂市北脇の西法寺が遺称地、東側の公園が外堀跡という)があり「城記」は天正6年(1578)落城、『印南郡誌』に城主大塩次郎左衛門・小六父子が別所長治に従い三木城籠城とあり三木城は天正8年(1580)落城。



別所小学校南交差点と実際寺



実際寺南側水路(堀跡)



西法寺(北脇構居遺称地)

②佐土構居跡（旧印南郡 姫路市別所町佐土）

『城館』は福乗寺付近を遺称地とし、『印南郡誌』は妻鹿孫次郎貞祐八世孫、清水小左衛門久勝が英保氏の郎従で天正初年当地に居住とする。福乗寺は播磨国真宗三道場と称し明石郡以西・市川以東の門末を支配していたという。西に旧印南郡と旧飾東郡の郡界があり、御着茶臼山城地絵図（『年報』Vol.23 巻頭）には郡界に御着城の東外堀の一部が重なり山陽道と郡界・堀の交差点に門が設置されていた。門より東が佐土とあり今は細い水路が郡界の痕跡を留め別所町佐土と御国野町御着の境になっている。佐土は10世紀の佐突郷（倭名類聚抄）、9世紀前半の佐突駅家（続日本後紀、別所町北宿）の遺称地であり、鎌倉時代は北条得宗家領だったとみられ、建武元年（1334）赤松円心への勲功賞として赤松則祐に佐土郷地頭職が与えられた（赤松家風条々事）が、永正3年（1506）には足利將軍家御料所「佐土郷的形・福泊」とみえる（室町家御内書案）。天文17年（1545）佐土の六斎市が確認され（芥田家文書）、御着城東側の市を形成していた。小寺家菩提所の心光寺はもと真言宗梨原寺といい福乗寺西側の猿田彦大神の辺りを遺称地と伝え、『印南郡誌』は永禄3年（1560）建立、半町四方（約50[㍓]四方）の垣構を記すので佐土構居との関連も想定される。天正元年（1573）別所長治に焼き討ちされた随願寺の衆徒は地蔵院善慶（小寺休夢斎）の縁を頼り小寺氏の御着城下佐土に鎮守白鬚大明神とともに退避、のち白鬚神社は佐土の北の山麓に遷座したという（兵庫県神社誌）。

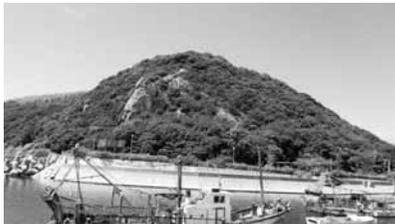


福乗寺(佐土構居跡遺称地)



佐土から御着を臨む、
電信柱の辺りが旧郡界
御着城外堀と門があり城内へと通じた

③福泊構居跡（旧印南郡 姫路市的形町福泊）



福泊港から燈籠地山(福泊構居跡遺称地)を臨む



姫路福泊海浜公園より燈籠地山を臨む

木庭山・姫御前山・燈籠地山の南側は頼山陽が名付けた小赤壁という自然海岸であり、東端の標高53.9[㍓]の燈籠地山の頂上が構居跡とみられる。50[㍓]四方の平坦地とその周囲に幅3[㍓]ほどの帯曲輪状の平坦地があるが、幕末に姫路藩福泊砲台の遠見番所が設置された可能性が高く構居の遺構確定は難しいという（『年報』Vol.23）。『播磨鑑』は文明9年（1477）没した三木氏一族の長尾新藤次通朝を領主とし『印南郡誌』は通朝を英賀城主三木通重舎弟とする。「城記」は福泊城と記し土岐氏末流の山下五郎衛門重氏が文明元年（1469）より居城、天文年中（1532-1555）山下五郎左衛門尉職重のとき落城とするので天文7年（1538）尼子氏の播磨再侵攻で落城したものか。福泊構居跡の東側に福泊嶋（港）があり、13世紀に泉州久米田寺長老行円が整備、さらに北条得宗家被官の安東蓮聖が巨費を投じて乾元元年（1302）に整備し、兵庫嶋にも劣らない港として繁榮し（峯相記）、八家地蔵（市指定重文）も築かれた。文安2年（1445）兵庫北関入関の福泊船籍は6隻みられる（兵庫北関入船納帳）。構居跡北側山麓の谷、貞治3年（1364）の袖もぎ地蔵がある坂を西に越えると木場、構居から移設したという五輪塔がある養泉寺の前から化粧坂を北に越えると的形である。袖もぎ地蔵前の坂を東に下ると旧印南郡西端に旧飾東郡との郡界に接して福泊神社があり本殿（市指定重文）は室町時代中頃の建築とみられる。康応2年（1390）石清水八幡宮領松原庄と播磨国守護領的形・福泊との境界画定が行われ（松原八幡神社文書）、これが郡界にもなったとみられる。境界西端に位置する福泊神社本殿は守護赤松氏により建立されたことが想定される（文化財だより73号）。

④的形構居跡（旧印南郡 姫路市的形町的形）

的方城、赤坂山城、赤坂城ともいう。福泊の養泉寺から化粧坂を越えて的形に至ると北に標高 65 ㍍の赤坂山（④-1）があり、赤坂山から尾根続き東北端に円光寺（④-2）が位置するが、現在国道で尾根は分断されている。『城館』は赤坂山頂の 19 × 23 ㍍の削平地を主郭とみており、『年報』Vol,23 は 60 × 30 ㍍の円光寺境内を構居跡と想定する。『播磨鑑』は福泊領主長尾新藤次通朝の甥、長尾新十郎重朝を的方構居の領主とする。『印南郡誌』は別所長治家臣の佐々木藏人が的形城に居住、構居は円光寺西南峰の赤坂山と記し、また円光寺の位置する山を赤坂の城とも記す。円光寺はもと浄土宗、日淵が法華宗に改め天正 12 年（1584）開基、東側山道南奥の崖下に永和 3 年（1377）銘の石棺仏（竜山石製、阿弥陀坐像と地藏立像）がある。

的方は古代の韓泊（三善清行「意見封事十二箇条」の遺称地とみられ、円光寺のある字赤坂の東側が字奥浜（現山電的形駅の東側から南）であり韓泊（的形川河口の港町）と想定されており、土砂堆積による港湾機能の低下で韓泊は 13 世紀後半に史料から姿を消す。14 世紀前半には的方庄が確認され文和 2 年（1353）妙法院門跡当知行的方庄（妙法院文書）がみえるが、康応 2 年（1390）石清水八幡宮領松原庄と的形・福泊の境界画定時に的方は守護領、16 世紀初頭は足利將軍家御料所となっている。



東より赤坂山を臨む、右手（北東）の尾根先端に円光寺と同寺墓地がある



南より円光寺を臨む、国道250号で尾根は掘削、本堂及び手前に番神堂、的方城基石碑がある

⑤国分寺構居跡（旧飾東郡 姫路市御国野町国分寺）

『城館』、『年報』Vol,22 は県道飾東・御着停車場線深志野交差点より 100 ㍍南に位置、糸田歯科医院付近より南に水路付近までの県道の東西を遺称地とする。天川の西側、有馬道（深志野交差点東西の道）の南に位置、県道西の路地沿いに堀跡とみられる低地がある。『播磨郡誌』は領主原田氏、国分寺集落西北隅に周囲に堀跡のある構居の畑と称する地があり御着小寺氏の支流の構居、1 年にして庄山城の戦いで討死にし構居も退転と記す。庄山城の戦いは享祿 3 年（1530）であり御着城主小寺村職も討死、御着城も落城（⑦参照）しており、国分寺構居は播磨に及んだ管領細川家の抗争に備えて構築されたものか。但し『郡誌』の国分寺構が集落西北であれば有馬道から国分寺に南下する道の分岐点（道標がある）東側の播磨国国分寺参考地付近となり、『年報』は国分寺構居とは別の可能性も指摘する。当地には弥生・古墳・平安期の集落跡である国分寺台地遺跡があり、その西側には県内第 2 位の規模をもつ壇場山古墳（国指定史跡）、さらに 8 世紀の播磨国国分寺跡（国指定史跡）があり早くから開けていた地である。中世の集落は国分寺跡に寺号を継承した牛堂山国分寺が建立され門前集落として発達、南に山陽道、北に有馬道が通じ交通至便の地であった。また伊勢内宮の国分寺御厨が設けられていたことが確認され、御贄の代銭と深野栗が貢進されていた（神鳳記、神領記）。15 世紀後半には相国寺塔頭林光寺の所領に国分寺がみえる（蔭涼軒日録）。16 世紀初頭に大村国分寺金屋がみえ当地で鋳物師集団の活動が確認できるが天文年間（1532-55）には小寺氏の支援を得て野里鋳物師が鋳物生産と販売を掌握する（芥田家文書）。



県道西側路地より国分寺構居遺称地



有馬道の国分寺分岐点から東、播磨国国分寺参考地を臨む

⑥樋山陣跡（旧飾東郡 姫路市御国野町御着）

御着城跡から天川を越え北に標高 166 ㍎の南山があり火山ともいう。山上（北の支峰平坦部）に御着南山公園があり眼下に御着城跡を見おろせる。天正 7 年（1579）織田信忠・羽柴秀吉軍約 1 万は御着城を東から攻め別所など城周辺を焼き払い、南山山上に布陣した（信長記）が、御着城から猛攻され形的形の引入谷まで撤退したという。『年報』Vol.23 は土塁や堀の痕跡はないが多勢の兵の布陣に優れているという。



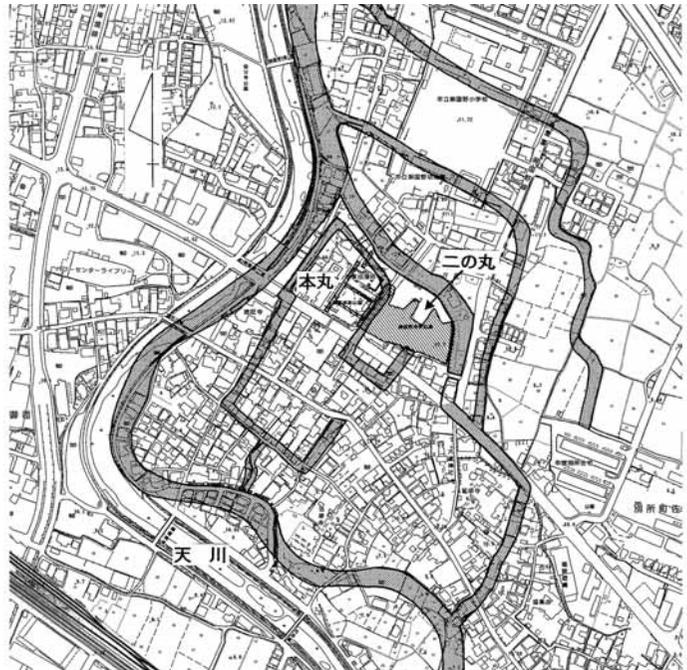
御着城本丸跡より樋山陣跡(御着南山公園)を臨む

⑦御着城跡（旧飾東郡 姫路市御国野町御着）

天川城、茶臼山城ともいい宝暦 5 年（1755）の「播州飾東郡東御野庄御着茶臼山城地絵図」（『年報』Vol.23 巻頭）によると本丸・二の丸の主郭があり北と東は四重の堀、西と南は天川を外堀とする二重の堀を巡らし、外郭に侍屋敷・町屋・寺院のある惣構えの縄張りであり、城内に山陽道が通じる。東は郡界を越えると佐土に市、西は天川を越えると御着西に市がたつ（芥田家文書）。市指定史跡「黒田家廟所」、市東出張所及び城主を祀る小寺大明神付近が本丸跡、御国野市民広場付近が二の丸跡。明応 4 年（1495）御着納所に奉行小寺則職がみえ守護段銭を徴収している（九条家文書）。享禄 3 年（1530）小寺村職（政隆）は幕府管領細川家の抗争に関わり細川高国方の浦上村宗との庄山城の戦いで戦死、小寺城（御着城）は没落している（十地坊過去帳、二水記）。永禄 12 年（1569）信長は木下藤吉（秀吉）らを二万の軍で但馬・播磨に侵攻させ、増位（有明山城）・地藏院両城と大塩・高砂・庄山の計五城を落城させ、置塩・御着・曾根、特に御着の小寺政職の調略を進め（益田家什書）、天正 3 年（1575）には信長から浦上宗景支援に播州に派遣された荒木村重に協力するよう指示されている（花房文書）。しかし天正 6 年（1578）荒木村重の離反に呼応、天正 7 年（1579）信忠・秀吉軍に攻囲され御着城周辺が焼き払われ（信長公記）、同年 10 月秀吉は御着城と志方城を干殺しか攻殺しとするので、小寺休夢斎（地藏院善慶）に開城の手立てを講じるよう命じている（黒田家譜）。天正 8 年（1580）1 月 10 日小寺政職は降伏開城（反町文書）し、同年 4 月秀吉から蜂須賀正勝に御着城破却が命じられた（一柳家文書）。『姫路市史第 7 卷下資料編考古』は昭和 52 から 54 年度御国野小学校跡地再開発に伴う発掘調査の成果に基づき、御着城の変遷と豊富な遺物を紹介する。御着城は 15 世紀前半は柵を巡らせた居館程度、15 世紀後半に小型の堀や溝が出現、16 世紀前半に本丸に瓦葺建物が出現、16 世紀半ばに至り大規模整地と土塁構築が行われ本丸と二の丸を隔てる大型中型の堀の出現もこの時期と推定、16 世紀後半には礎石建物と本格的瓦葺建物が現れ、石垣の部分的構築があり、土塁は再三増築され基底部幅 10 ㍎に達し、御着茶臼山城地絵図に描かれる御着城はこの時期のものとして推定される。



樋山陣跡(御着南山公園)より御着城跡を臨む



御着城跡縄張り推定図（『姫路市史第 7 卷下資料編考古』）

（黒田家譜）。天正 8 年（1580）1 月 10 日小寺政職は降伏開城（反町文書）し、同年 4 月秀吉から蜂須賀正勝に御着城破却が命じられた（一柳家文書）。『姫路市史第 7 卷下資料編考古』は昭和 52 から 54 年度御国野小学校跡地再開発に伴う発掘調査の成果に基づき、御着城の変遷と豊富な遺物を紹介する。御着城は 15 世紀前半は柵を巡らせた居館程度、15 世紀後半に小型の堀や溝が出現、16 世紀前半に本丸に瓦葺建物が出現、16 世紀半ばに至り大規模整地と土塁構築が行われ本丸と二の丸を隔てる大型中型の堀の出現もこの時期と推定、16 世紀後半には礎石建物と本格的瓦葺建物が現れ、石垣の部分的構築があり、土塁は再三増築され基底部幅 10 ㍎に達し、御着茶臼山城地絵図に描かれる御着城はこの時期のものとして推定される。